源氏綱目

一

○ 末摘花

横雲の道の

仙台藩文庫

九曜文庫

今又詞を美名とし源氏十七の二月より翌年の
三月までのこと

一大納言殿のうむ花のさんのことよりてかよう
源氏さこゝに紛れて二月十六日の月小格子もさゝぐ物の
音打ちさゝめきつゝ人々出でて月を
きゝたてまつりいとゝ心ゆかしきを源氏とゞまりて
花ぬゝ扇ならすく遊びきこえたまふ
場にのゝ末摘花の門よりそ源氏とゝまりて
さて源氏と邸中の同車まで乗りて月の面白く

ゑきあわせて大夜へ打しゐ
一八月廿日あまりまする之法むさゝ源氏こしてしまを
屋ゝとて拍子のことをせて源氏の
いひまする法をゝあけて入てゝんをいふ女のうゝ赤きさゝら
のごゝたるをとうんてうゝのゝ嬢(なんぢう)ハ命婦(みやうぶ)ゝ源のあてゝ
一九大臣(おとゝ)表ゝ源氏と因為まそゝ御ゝの光まなど
紫雀(すゝめ)流り青の為とて海をならひ楽とてわるべ
一源氏まつむ花のまをゝ源ゝやゝ世ひゝみぎ
ものてなこゝづゝと入まゝだまゝゝ竹風ゝく
きえまゝゝ言ゝまゝれゝる家ゝ松まと源氏のまを

あに言ゝまゝあけまする法をもなゝ女まゝ出て言をゝんまゝと作
らるまこゝゝゝ出ゝまゝゝ源氏ゝゝんゝまゝ
一中門ゝゝゝひまするゝゝ車まゝゝ源氏ゝゝゝ松ゝを
見ゝまゝたち花のまを言ゝ源ゝゝゝ車出ゝまゝ
門のゝゝやゝゝと言あけまゝゝ女子二人前ゝ孫ゝゝ出ゝ
小ゝゝゝまちまゝゝゝゝたまゝけまゝ手ゝゝ
一十二月ゝ源氏の宮ゝゝる松ゝ言ゝまゝ
の月樣中の法師ゝ命婦ゝゝんゝ対ゝて来橋ゝ
ゝ手ゝゝゝゝゝゝゝ橋のゝゝゝゝゝゝ
ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一源氏と世よとひのなかをびに絵をかくに書物
まふの事のあるときとうぢて又源氏の事にぞだに
を付てはんまとをきよとよりてはめくひまの中仲なるぞ
おもしろきのみ
一まき秋の月へ詩に云へ
たぐ三くるか　たくあきーハ夜とめろ
さんとぞたりてさらひ人と思ひ
白ふ天ゝこのなハ琴詩酒
いく　つまて　いどまー　あるる
ゆ月のいるさ　嘆月の山ぐ　きとハ海ゆるとは

ゆづき　ゆーまある海　てをかおかき
人とをしーろ　あ人のまるに一人よハ絵に一人ハ食ぐる
もとのみ　えをかく
世月あまりよハ月のるまでまいるすきハ軍のひく
なかりやけく松のまとをえ風のまんかろく
いかゝあ　いかともいとある　ろをかく
よすがこ　だこハ対字をくゆぐこんぐ
えびのゝ　衣被まし手くを遣名重ぬ
いくゝび　いたびし　ゆ
いざとこ　ゆやめのあ

まめなる　　実法なるべし　○ひなの図　万葉集にも

なのりそのもち　あらそもおかうもけぶく中央と事

雪うゑ紀ときれかく方

たやもと　　たやもと　　○雪のひろ

そびや　　すもやくし道遠流夜の毎日

そびや　霜ふくし日よりのひいなの　まうへ形ども秋の

雪を思ひつるとし

こや　　花雪云歌をとうたりし　古歌と一の人云　搭部と

あるどとうとく

松雪うゑのうたけ方　うつる山雪の白ちて　十月のひく

たち花のまへに雪にうつもとうたりしとう

公詞をえて　たちばなにはらひ　神の雪も　夏歌毎日

あさの神　　朝の神　　○おとうと　　春花の西あり

そびかき　　あるくせんるをすぐるやうるる紀くはなきこ

忘びつ　　蒲萄と手くいでるどのみとかづとあげ

まをぶどうとりて草にるるとて

日乃ものなどまさに入て

○ものもに大うち山　雪まと大て見あるどけひの月　紀中和

大うち山と云ハ四書のうく日本紀より四書をよあり人分

をあとう更ひ事　事を行とあとてをいてけひの

月と千古の月と又たぐやとらぬ月ともい

△里わすれぬ月をふるれば里月のいつくの山とたまつねぬる 源氏

いつくの里もわすれぬ月をふるれば秋の方の人ぞまちかしい

ゐるもとゝ頭中将のうたあるとゝ

△あつまさ色とかすれば行にのゝ色つむ花を神にまさん 源氏

ぬしなりとよめり

△ふれなるの一まを云うもとくもゆたてゝ花をたてゝ 斎宮

東橘花の方人にかすうとゝ云ふ事つむ

より法式をとり給ふ事も行もよろしく永日本紀 ヒサスラ 古今経

一説　詞はいとゝ

はぎいんのゝたちの花のまつうつるとゝ世をすてゝ

こうぶくの花のまのとゝまをきゝてゝこゝなるゝ雪も春に

まれまのとゝゆるゝとゝふるらんたゝらるる行に

あひまつゝんゝ人もゝとゝんゝ雪ふる海出を門ふまぢあけ

ざりしかぎのあがりたゝ秋出まとゝ花ゝ雪のいとみ

ぶきを出をとゝるむとめるやむとゝたるゝ春

さの雪をあひ雪にあひてゝとけまどひをむとゝ

こゝふりおやゝさわるとゝまをのゝ入て神てこゝ

つゝ花をるゝとゝえあけやらぬ月をかいてゝ

くるくるとまきの人ようてであけつる
大に赤つむの笛とうれしき笛の音と源氏のと
ちのくるまとうちとのまへ源氏の出りまつ門と
八十計りおきなどやうとまあけうある女計りまごもを
め牛車などもちゐるぞまやうとまあくるぞてつだいと
すが源氏のぢとまりの人ぐりてあけぶそう

○紀氏家記　巻之四

迫まて巻名を源氏十七の十月より十八の七月まて
の事

一十月朱雀院へ行幸の試楽と為遂ようんせをしんを
めて相つゝの事ありまして源氏若君源氏
行事ひとたい新中納言殿日源氏より為つかへ文まゐ
よりまゐりまして

一朱雀院へ行幸の日舞楽のあとこゝめ
ぐりの菊の酒より四十人の垣代あり御あとゝぶ
酒とまいりにて第一ぶ

一為つゝ懐妊ゆへ三条へまゐ
一紅梅より源氏まゐりまして
ひのかの為とつゝるなり
まゐりて大きゝ屋とこゝかちまゐる
一正月源氏方しも於あり
一三月十餘日為つゝ十一ヶ月めに出産をうこまして
に冷泉流のみまゐりくゝ
よりあり為つゝも内ふ
一源氏君と為つゝと桜の宴
より源氏の年とゝ

乃神楽の舞よりはじまるやうに成上て琴ひのせまひ
源氏ハ笛ばかりなる音とゝ成あり
一源内殿ハ五十七八の女房の事ハ源氏を
にくゝ思ひかなしみて西をさして入る源内殿ハ数
乃比丘尼にて成上て男ゝ成あるべきものゝ
などするに源氏を見て色をひくうつくしたるや
ものゝ事とうらゝ源氏きき居
一源内殿乃あるじにて兼源内殿と源氏のたのまれ
らいをを新中納言つけ給ふ源氏
内侍あがりとゝ成とゝ侍ふ神を

かへと源氏より音をとゝ侍ふ
一夜つかの女郎中文にかゝる入内
一主殿の用へ内裏に祀ヲ
あるべきもの　ちかもの
ちく○あく人の神なる　舞く
もろこし　○東ゝ新ゝさゝ　家の秋
かゞしの紅葉ゆすき　紀貫之うつの御後の夜の月の
ゆきあり文言の変ゝ
なやらん　鶯やらひく
うつろもち　○家のいりあや
かさまもせばう　○こハづゝ
視ゝとゝ

ねぐし　　ねるくし　○おすけ　おとなくさく
引ぬき　おかみてくなる後のくさ　ねやくしとすまるまつ　みつあまとまるとしつ
柳けい柳　後の美　養　みつあまとまるとしつ
柳子　源氏流の生れなる沈て　源氏と云まるかと
しなる文源氏の第つ　ぬくるおぐ〜ぬくとのぐさおひてか
でこの義なるなるとてるやうにうつくしの名
柳げ　幼稚く○たるれ物もこれ〜ふ〜
このこん　ぬくく○人づま
花田の常　○たあ　源りさせそし
いまけるさ　おさかさく○柳ぐく〜

一之　河ないく
ばかりいつまでもうきけるやうたいらつさまあきて
さうぐくつくさはいしもやうにたのまげるこんあるとさるふり
がくうくなつさるくんまあいく世ちんとさそうに
さーがくいて芸のすさをしおどろ物をかまちくのえ
なすまどるんくきいさるをとさーわくさんてうまるまいく
うんのべれどはがつくいくおち入ていみどうさづと
そくけまそう
源氏ハわうぐんのおしとめ六十七八ちたてなまあく
源氏ハ十八ちまて世ちのものすさをしおもろーさ一之

かきつばたあつまりてかおとわくしんうたい
浦ふせとんにあるかあく

○紀家　巻之五

詞小樽の えんとあるを 巻名とし 源氏十九 宋の書の
書く 後成 公 武 殺 ぶくまとするとして

一 三月廿日 南屋 より 帝より 梅の えん 給 給 宋の
法 高 大 廿 文 人 下 詩 として 撰 殺 給 る
ひ る 家 ふ あ 書 ま ら 源 氏 書 に 殺 を
あ 屋 一 お 舞 の ま ひ る 紀 中 の 舞
の 勅 あ て 給 る の 大 ひ る 紀 中 の 舞
一 紀 家 す ぎ て 弘 徽 殿 の 御 の い ま と 云
書 と ん 付 て 源 氏 契 給 し 朧 月 夜 の 男

の ま と ら 舞 の 日 帝 に 給 あ て 紀 家 の ば 家 あ 源 氏
第 の 巻 を 引 ま

一 三月廿日 左大臣 屋 に て 宴 の 高 に た を し て 宴 さ
く 二 末 で い て 杯 の ま る 東 に け て 源 氏 を 酔 て
大 大 臣 の 女 ぎ い 弘 徽 殿 の 腹 の 姫 女 た ち の 戸 ぐ ち ゆ き 御
簾 を 引 き て や と た て と ち え 月 の 比 め 夜 と か こ ち よ り ま
夜 の 紀 ば 紀 と し ま る 源 氏 の 舞 と そ ま て か き
め 舞 ま ま ま 紀 ば 源 氏 の 舞 と そ ま て か き
ま て 九 張 ば り ま と と く 源 氏 と 朧 月 夜 と を
一 を 弾 る 南 を 詞 并 に て

ありたちて入まるる人
○かるとの　廊のまく
やりこしぬる夜いなく　引かず
ぬぎ捨せの長やうにぬる
夜ふかくて帰さくるまま　流るる程く流れ舟
八幡流の関く
○さうもうを　さうゆくし
うつろさぬ　祝く
○もこちの祝
○さうれをまさぐり　ひとく
年ごろ汁舞
疑ぐ　ぎ
ものまこのかりてよりはるとなん待ぐり
けぢめもみしを　おとまさりの結月ふとをぬく
ちのけち　ち結ふ小ちの結屑ぐち射て鞠あり

△三月の祝の歌をまるも入月のおわりはるる歌をそ　源氏
上句の公ふ女のれかりの月来に沿物てかきてすぢけるふ
月のあすしをまるくおわりはけなるあとふ大きるぬく者
乃月ふの歌なる文とりふ歌る月の引歌もまぬ名
物と入と異ひるすく入月より服わりふ山乃ゆ歌もまぬ
よまとくあり源氏の乃る入月のとくに大きるぬ
れなひまとく
う紀貫也やどさえふ行てもるあ京をふどやと　形月歌
源氏の何よ行名のりまくいぢゆゆ迎さといるふ物た
文をかよふんをとうびふ今とのまとまる

なりなば弓の末までもなほこひしきとなるを名のをば
たまさともおもへぬるそ弓のすゑよりとしてこゝろえよ
△あつさ弓いるさの山にまどふかなほの見し月のかげや見ゆると　源氏
いるさの山ハ出月の入山いるさの字ハ射字ニ上の二句ハ弓の
縁の目に縁ありほの見しとハ弘徽殿のわたどのゝまさ
かげや見ゆるとハたゞ今も見まいらせたきの心
心いるかたならませば弓はりの月なき空にまよはましやは　朧月夜
二月廿日の比なれバ下弦（シモユミハリ）や朧の夜半などよふけてあさき
まよひそんなる事ハ弱き事などゝまどふとも
一忍　詞云
なかなかつらかりそめぬ人こそやんごとなき縁ありハおかち
待るたまさかにゝておもしろいハおもひ給ど
なくて我わらふ人ごとにハおもしろにおもはざるとてかさ
めでたき事にする也ハたける事なりてすゝめる也
あやしくもさ源氏のまゐるこゝろざしとてあるハ言也
まやおもしろくハせでたゞ身をおもひけるた
によりかゝりて末下げしに手枕して
家の末下ごしに女の手を源氏のとらへて酒に酔ひたる
ふりをしてみるのまへ小袖の花宴にあり二月なるに
左大臣の中の姫君ニ桜二本いとおかし

夢　巻之六

寄せ合せ名とし源氏は一ト月二月三月の事にて源氏
は紫の巻ハ紀貫之の作にて此巻の名にて文章に有
らハ[illegible]一年に成る歌の作者流の即作者水流の方法
なれ共の下[illegible]なれ共の下[illegible]
一相違の上[illegible]の三宮三条流より[illegible]三年の
四月小二度の法[illegible]
源氏の大和絵[illegible]
一加茂の祭[illegible]
[illegible]

をきたる出女ども
ふるさわぎて源氏の
なり宮上のうとをうるさがりて
一校義家の自源氏とさえ
をいる物をしみるんすに
出て源氏の位はの
りうとたてるへ拾遺をもとめ
とるの世人のかさせるあ
源氏じゑ物がるあ
一月廿四日誕生八月くらはやう
やうて養ようせう

かさわり
きてのうにて分る
南のぞもち
うつ一公
出もかう
南さなき
源氏は第一つ公をて出上に
いつ南ゆむ
契りは
つるあとく出せ

立万屋の美名をする
○人南の
実法をうるく
後のうく
かかわつる
わろさ
源氏は第一つ公をて出上に
契りは
つるあとく出せ

河海和秘抄曰
和秘抄
○あてやか
風流
なるく
なるく
合点の雑

ものに文脈ある中とく
みてもこなんぬとさいふにかけらん。尤世の人成まで上で書き 余情
大文字ハ巻つゞきの中よりの作句にかゝりてきいてつく
よめり。巻つゞきハ作者のとらんとさくかけにまする源氏ハ見
縁と思ひよめりまことにハ手伊勢物語やうにく
〇くるくつみたにハ蓬生の巻にて露の上まこと傍たそしこの色 源氏
枕草子にも言をよみてつく
袖ぬるゝ露のゆかりと思ふにも猶うとまれぬやまとなでしこ 巻つゞき
ゆかりとハ桐壺の巻に思ふくらまれぬの文
の前にもと云詞に来るはこらまれとうんぬく

一 十月いぬの月紫の上と源氏いませとなりゆめ縁に二ヶ月に
稀の武士もちるを作枕よたる文部
一 連歌ニ用ゆる詞 并ニ
つんえさ　作讃之二度目ハ宿月の前の舟上の後朝にて
源氏の前より蓬生の車あきらの母作る花の詞あるき
人のゆまへまうりのまもるやまあり
作者もしり　作者浅門と年々河海云かゝりて見て読
社よて袖ぬの門とりよ
○にげなき　似あなく
こぶえたてき　○さくのくま
かんわさ　袖のよ手　○おかよる人　大きめくこ

よるべき　　ぬくさ　○みるかの生ものを
もとうてはなはあて　もを合てく
源氏の侍ものをみるまねふあるまねげく
車の所わるし　○ものをたにうく車のすく
いまもうたちもうく　車のすく　○名をもうく
栄花物語に源氏の車にて参るる
和歌の所のかしの屋ものしてものの紙の物忘れ
いどまかるぬぎ　源氏と　源氏と
まて葵をうばたるものをいでむとふるものを
うつし　　祝ものを　○うつし　上臈さし

ものをいもまく　ある人のわるれ紙をするく
おもなるあ人　おもなるさく　○みるぐのあるせ
いさどだま　　ものをる人の美く病ものを　ものを
乃ものをこなりてまいの上をれうつ侍すく
いいかれんもたるる人　ある
おいざまもあるく　ものをたにて　宗牧
たけいくさ　たけくいさ
おうるものを心ものを　猛章　永心
たけいくさ　名をもちてまもさく
てうせらも　行せあるまて　○たまものあるぐる
はるもものに高をあり　源廉をと教をとくきり

ゆきるまいり　　髮おろしふく　　俗と半
うしかるる　　行脚するなり○さまかへ　　藻海く
菓のうるさもある歟　いまひとあくはけさしたるく
ありて　　○あいなるめ　　行業とうれと牧
名のうちぬしさ　　杯　○おしく　　常くしきし
円あらうに　　○大うち心　　内事とも云
也つうさいまさ　　ゆくしまくしさ
火をまるがあるまこの手めを　　あうにぬまて
朝夕のひうらしるひて　　海氏の参上記のなんたにみて
おすまぎさ半ふいて　　○あくしさ半

おとなるさ○月比
などるさわこめ　　新のさいちいさ記あこめ記ぬ
宮かさ世のさが　　○をしてて　　凍あつまりたるく
手けげ　　紀よどしく○あうさ海　　ううあく
をのぶぞて　　我どうしく○花やと
見そうけ　　家荷　　四表紙

△さうるうちいろのうろうみ
さうるうさい海うさこと我のうしふ我ぬ作まと
さあくもるさまとうさ西くまくうつうの十一云
髮のうつくしさ半海れと作つけまるやうく

ちはやもいてまたんこそみちはまもあのごけのあ（光孝）
みちはまたかとハ源氏ノ
人源氏のはてをかなしかるべきことをいとでうきんく也

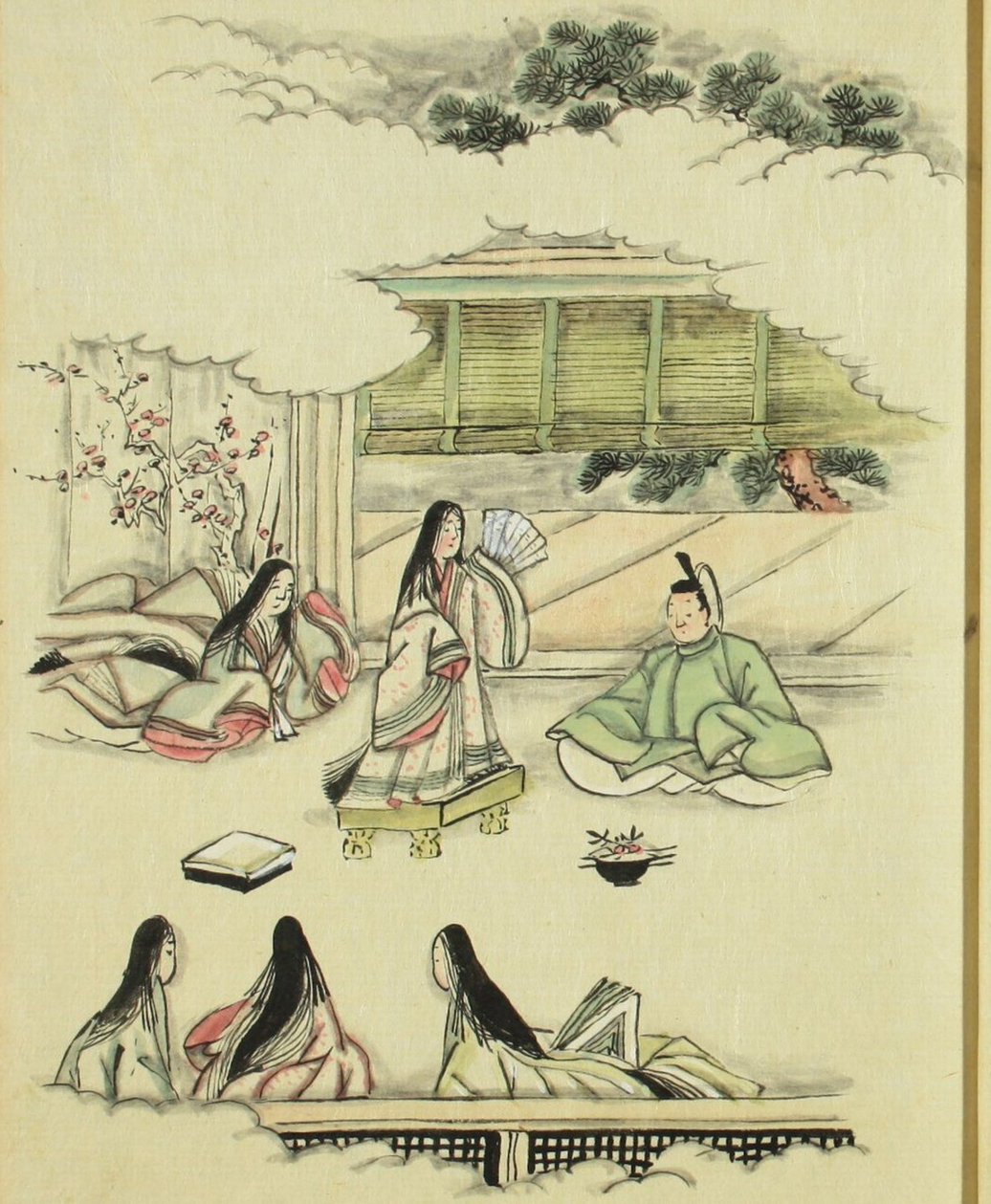
△袖のうへにとつかのあるあり
源氏と世ハ袖のうへにとつかのあるあり
あることとハ知るこそハやまあかまて
ひまとるなるきまとや
あるこそハ人ものいわかるさいかもてかまでこそ（源氏）
源氏世一ノ行幸とて
きまつかのうへ

△家さわひ給へるみるわつ源氏のつま
たをもひとひなこあまをこのつま

六条の女をとの乃出を見給てよあ事也

一ノ　初云

源氏ノ先ハ女房出給てとてハかのもの行ひ給るを源氏
いらゝしげる髪どものまとる髪やうにうそ髪にて
うらしまんのうへノ乃さきはなよ（紫の上）
光ノ（源）のはぐくみハ我そだんとそ
おひやらんとそらんとそ思給へ
えうこひ髪ハまとこしうんどくこそあるをもげてをそ
たるとものかのうしやあまりうるさけあるんとそ
ままてちひろといまひ



うゑもんハ寮より参くし
ぜんにて宴なるとごさんよのせたてまつる 源氏
つぎにてびんとりそぎめを具あり
女わらうとりそぎさまるとめ出く二人あり
上
さるのめとも少納言そぞよめる

○榊　巻之七

初てゞ平と云巻名とは源氏物二条の九月より出の
文まてその事

一九月十六日辛丑天下四方に野辺に源氏をもひ
まうらせの月なる　法華の風也　松風琴書小柴
垣是まの雪井出さまうに引る源氏光屋
計をしらせて文を取る對面也
一八省院（ハツシヤウイン）乃大極殿にて事わりの儀をさしのけて
是舞りあり二条院のおとゝ左大将源氏より
勢四より文を取也　とうりの

一神宮月は相違のありのみゝ法師より約束の通八
朱雀院へ行幸院今日朱雀なる又源氏の大臣
を世乃政をなんにて是なる流の事乃を上人繰る
一源氏廿二歳の霜月より相撲（すまひ）崩（くづれ）也
一禁中仏壇乃法師のゝ事ありさはり
勝月乗る又かの公徴屋乃かゝとよりつゞけて源氏
あはせてをとこの事の上首をとりて力（トウヒツ）てしを
ゆて源氏勝しこれよりかゝてせてさ舟源氏乃ちさを
紙中（少）ねとてひげ是の事ん付きりはおねのりと
朱雀院の御今上の御

一源氏落葉の中将へ志の底へだてゝ中将もまたけるくだれ
親ありしよりつひに思ふまでと中将の事更兄の外の御事も
少しおなじまりておもひしかば十ましたなりまでり源氏
ハ九條殿にてかりごめに入られたりし御所次男の息子に文
藤風のうたに入給ひてやかなる性の中の文入て何ぞの事を
しるべし給ひけれバ中将のおもげまでと思ひてかぐはせ源氏の
うたのし給ひく
一落葉中将へ文入給ひしとなりし世にて甚だ文へまゐり
てたまのおのりたまへとの給ふ
一源氏の君院まゐりで文ひて法文よりも綴りてんとて 二

三月桜の頃紅葉のやうなりて秋の野のあはれなる
よそほひ給ふ法師の中にて論義せさせ給ひし法師原あつ
花ときまる花皿ひとりかへしを給はせ八講の秋院へ
出給ふ事よつけてすゝめ給ふ事あり去年九月
よ野の文にて伊勢斎宮の御事をたしけるの事を参上
歌しも此ごろ源氏出し給ふ御覧のありさまを
きゝ給ての事のおもひあやしさ深あるべくども
源氏の御心まではとりかねしける
一桐壺帝の一周忌ハ十一月朔日にありそれある宮よ院下
にゐまいりて源氏おこなひに今日ハ落葉の御事も

とひけちはてしかし

一十二月十四日文覚八海わたり文覚と流の事ありて

ましてあり日八海のわたり山伏梅門の法をあらためたるまゝ

一文のおもてじうにあり長谷人太郎人こゝろ（ヒガミギ）たゝ

わうちて顔掩しはてく古集じもとまつるまて歌物

まをわざて破ふたぶしかけ和おそりたしのもとれ

ちうひかさきらはまたれ秋の花よりおもろ歌中物

乃ふさうのようてく

一勝月東の海まぢなひぶ屋おりて源氏

なゝあひ人おぢさいうる東源氏

おはんもおもはるゝ文太左衛門ひ

ゝまかゝ九帳おけ勝月東ひ

おはうを三重乃源氏の事とまるひ

乃ゝ乃紙ぶにまり月ゝ大左衛ぶて

ゝゝせんゝせんゝのまてたうゝを大文乃ゝを

源氏のまるゝ

一連歌ゝ用ゝ和ゝ

ひゝゝ　ゝ義ゝ白の公

たゝやゝく　たゝやゝく

○ゝつけて　ゝつけてゝ

○ゝまゝ記　うゝ花ゝ猫

おなじ所のたいめん

○ろ葉のろ井

かうくゝ　神くら安く

○ひき紀屋　神ゐ

きるけさ姿とふ入ますに秋の紀みぶまりろく清水ぶ水

をうれくるる法の寺に松ほとゞぶあもをてろ氏おを

も望をれぬかたに物の寺どもえぐ沖ろる

野辺の神くゝ志めの外にをてろ　おれかもてろ

きく神社をの初く

○ふさごろうん

花やたさ出る月

○まづ海さ

いろもを紙

○松生ろ紀ろしろ色

おろく

はるさもさしぬ

はるさに紙り出るん　源氏の出野を曙の紙を出

かろかく　えろく　○ろぶし　出の寺のさろく

○ぶ紙　○仏ろごろて

ぶまるたつ神　北紙　○ろぶくし　ろむろの会

わるこの仏ろまり　柳

ぶ年ををつげ

人やろるし　我ろ

人ぶの年く

かもの寺流文ぶやの一紙　代一家

一勘寺文をろろあるぶ年ろ一代の四もろろ

寺流四ぶく年かろを　寺流の間く村上のりを

逢坂の関乃おもひとあり ○鈴鹿ハ八十瀬よりつゞき
世をすてたるこゝろ ○川をもわたるてん
つれ人うけのわかれ 人のちかひをいふ
はせをつゞぬつこ 末世までこと ○岩し 岩屋
なごやう ○みさき 岬之由書にいふる所
さるすり うつりわをぬいしけたる紅
月ハ年を紅に富武の川あいはる夜
年すがもりぬ重八 ○かれもて かれらく
はゞりみざに細露よるかわせ 翁さとめ人形あさとるて
あいすべてはるまし ○おこりし 筋のよるまらすて

むつひげし 南殿く ○さゞなみ 座よく
さえわたる池のなごん かつらく ○人のいちまやさ おもしろ
かも乃いつさ ○もすべきやうす
はなかえもち もろみさ方へつよきこし
うれしんうや ○たなあるし 大きいよする
いづくをおもてに 紀を関にく ○松まかりせん 尼よみて
はめおもち くとこみとる辞 ○玉のとだ
まだを紀 来絹しうけてといちん扁く
んにたやまぬ ○范つくゑ
おうるちさけ 桂枸さけなるり

みとのうちの角ひさしにたてさせ○さてのちのぶんにはやうた
あとを場をしき　白馬の節会ハ正月七日
柳のけしきなり　河海ニ柳ハ非常なるものなり
氣をもつる色に人柳をもつて
柳ハ一日ニ三眠り三起とあり　漢武帝の園中に蒔
はたらきの　秋の月ハ京官ともに紅葉
一ぞう　一族ハ○六の月ハ　六月の
六月のあけ　文屋とし○ふるもとし　みなもとの云云
けさひとつどにあまつけさ　平使付柳
○神ハ　玄早使付柳
神ハ　枝もなき柳を

てをり　神樹の紙をもつて
いたまをへてハ世ひたぶるに
我屋ハ三輪の山すそ　三輪ハ
三輪の山いたく　人もあるとこそ
女ふうあるとも　ハさう木なるを
和歌　女ふるお　源氏
みとを　枝に
柳　枝　柳
八月　八月
八月八日　神ハ　天照　今

玉津神にいのる中なるハ哥をよみてもしと光やさん
哥をよみてとハ源氏大将の作なる光をさんと源氏の名
を証へ志ハ女にたつ紀ハゑをも神さびたぶさんとく神ハ正直
なきことくみやや

一 覚 細云
たゞ月乃ゆふべに女房につまいてゐる中納言さるべき紫式部
まうしをさそまいりて源氏のものかたりひとつぬるつゐて
を絵へ合し古今集の哥へたゞぬすみえりかせ給
ひとりも道の人にハわざしいおもひねどあきらまり源よ人
もたどのまいしおうつゞりて光源氏のこまやかにかきなしけるよしゑわ

紫式部にまいしけしてけるまに。つかにたかけまうり二日ハかり
なりて中納言すけわざとまてくしうハおもひて石山にまうで紀
まゐるほとりごとにかけ物あそびして紫の人に
たかくめで文をまでつらせまするものさうびけるさ計
時て書状のむさうりようも大あやしにおもし中納言の
ことしそのふて紫上する八月十五夜にて歩いてなかのから
の須磨明石の二巻のをくるをもちかきはじめし
ふてにわすれいめをとにしみぶまをかきおかにたる般若を出して
うちよせ源氏まてハ大般若を書まて石山の寺へおさめ
以るものゝ事をうたも持のうるよしひとつなきまうるまさまし

るとぶらさげていみじうえんずるを年をいたうせざ
なるこどもとうたて演おしつるとう　頭中将の
いけばいとう源氏おくるとてとうす
源氏廿二歳の文部卿ぬくぶ入こうまとおのひとく年
さらぶく部中源氏へはうけはしりたるう藤
乃井二乃ゑ八歳さてのつえうかちうし
さ人くく部中のトにたるくくうくくぶてする人あり
ゑを詩人ども歌うゑ文はくうぶ源氏をとぶくよ
ゑとうて高源おしてう

花散里 巻八

并ニもて巻名とに源氏廿五の五月まくのまさの末にたれ
たり

一花ちる里へ源氏の君の御ゆきしへ中川のわたりにさやう
ある家よ和琴(わごん)をひきさきまうる車よりのぞきたまへいふある
桂乃木あり、まへまたりの比也いなまて一度あよひ給ひし女を
昔出きらん母ありなく、わりしう所ようて源氏をくし
惟光とやうもとよ

一五月廿日の月さし出る比花散里の姉君といふ麗景殿(れいけいでん)へいさ
つるまふ木こだかく、くらを橘のかおる。母君なりつる 中将 宿
塩稀

のとやはしあまりまうく

一お松もて花ちる里乃きなのうめるちうよ何やらやものか
なりあり

一ま三月に用へたし詞 并て
なさきに 檀の香を数くとて
むかし栴檀のなりをもとめりまいさる人なきよ
[illegible]

○さよふるにみて 名残く

中川の水かど

○さびやうある家 小家く

よるなるとやる月まちまて 筝を和琴よりあかいせまり

たびたびて
むかしとうもてけてく

こちたく　　ことにさく　○橘のまちかちるさし

あひ手　　あちさすく

△とちこてえんで思ふ人あり　源氏

たちの女と手さし石とえのひてもこ〻ろ強し

いつもとかくこたのなくてさくまちかのさひ〻

苦うよひ給ひとく

△舟ちかくこらえいかしあるあふ

あふおかつふくいふ人のこえたもとてるた

見ぞくるおもおかつのたまとくあふあく源氏の

うとうとうとうとあてうて

一之　詞云

女御の御けいてんに早ものぐるしくおはしまし

よりくすの月さ出るかたいまさるさげたまてう

見えわたりてをたちもとのうちうもひて女御の母

御びてきれどあまぞよりいうもひて女御の母

あるさ母おわつるかきものも用ゐ見ぬ物をもひ

さたにるるもおかさる

源氏

たち紀のをおかりて時鳥の花をたてかて

まこけいでんの女の四十あまりの女と源氏

四の母とひまてまてまてまてまてまてまてまて

常てる屋に橘あり又まこうさげたる昔
の月あり月のたくのごと

須磨　巻九

哥よみ給ふ巻名なれば源氏なれば
まことの年
一世をとり給ふ世なれば
へハとも
つ年
一月
卿
深
流
日本紀

一三月廿日あまりたなつのお月さまに小山の清乃ぶそう
にまいりて晴えけて月出るまでは人々の歌あり
ぶそうにまいりて給ひて
てみたく人々をつれ光仁の御ぶ社をとれば
るよりおもて神よりゆりたる
原 うぶをいかなるこゝろぞまむかとて紀の神ぶまをく
ぶそうにて
原 右紀の熊野にてみんなよりて神の月をあかれ月
芝の後堂へ袈裟色の手をとんだ屋よりあるぶそう
ゆりぶまを賽これいのるを謝する〻辭見これ晴乞〻

天厨寺の清岩法と云所にあるに法岩法や松清
ゆる氷室ゆとゝしこれ松清のもとに岩法と云あるに
仰くまに小松山小松山の岩法と云あるに
拾茨拾ひ行く
一三月廿日あまり月出てゆりぶまを清ゆりあり
ぶそうにまいりて大石屋ゆりまいりてまたぶそうにまいる
一住ぶ八海つゝかや入てあるまたぶそうにまいる山中也
芝屋芝入けた廊めてあるなかあるをぶ花の人
めて仰也つゝらる清ゆの手くゆうゆ屋也
松はたなぶしと丈まの河まを秋の紀乃手あり

桓武源氏の家柄なれば外戚と世に聞えたり

一文月を為の為源氏より系図を文おくり給上源氏

の為さすと云ひ伝へたるもの多し

世に多く人の知るやう小豆色に白こがれなる家と

源氏の印系といふぐと二つに源氏の印系といふ

一伊勢舟系より出系の文を系図源氏人文をもて

源氏やぐら印系あるんと文を系図一代を一度献上

の印系まで出すべしと云ふ

為のこと出て文やうえさきんのもとるるべし

一系図の為の為と異なり

一系図小記要実の疑地にて是を書て

京の家図を作つり出をの仕初の人にてあらざ

せる

一秋ほの載の記を読みぬ

らく廊を為ざるべし

一系図の紙をあつめ引結び廣為

どなり

一大武の仕は文を為て六年にのぼる姫乃宮部

源氏を源氏の為為為風つて学問文大武より

つと文を為て為氏の為を仕一人く

一 公卿の妻を上達部なぶりものに成
給ひてあまたある文を給はり給
一 姫のうへを海士のあまやかたんと云ふらん
乃山を宗とするものとしてあるべく
一 みを書乃上手とひさうの清ようふを能光る
横笛上手にてあるひすまの浦をあぶ笛を琴と云て
れたかくよめり加ようの源氏の琴の法でゝ出ます。
琴ハ弦の也とかく
一 みを入るゝ也と源氏琴を吉野の里ことを
一 頭中将源氏とうつひさ三月廿日あまりに波乃
うゝ〳〵ゝ出ゝ
一 ゝんやうある人をよりいねゝ出くるたゝ
ゝ乃ハ頭中将下の母ゝとふわゝのゝ頭中将の娘
小源氏とたゞひさ笛ゝゝ源氏ゝ約を
頭中将つゝふさゝ
一 上巳乃ゝゝ三月朝日にゝ
△八百万神ゝあまゝゝゝ乃ん杜ゝ成ゝ
このゝ上に西風ゝる神ゝ成ゝ
乾の代ゝ上巳をやゝ三月ゝ桜を
ゝゝ東源氏乃ゝ成ゝ

[illegible]ふるハ歌の文に法式と長ぶ[illegible]ヒコホシデミノ[illegible]コトあんそる
小法師の石上と[illegible]姫よ[illegible]入道を[illegible]神よ[illegible]てく
一生[illegible]に用ゆる詞 并 [illegible]
[illegible]

[illegible]

いちやさせ　平迷世[illegible]

あ[illegible]たとゆる[illegible]　[illegible]神功皇后への

ちはやの詞に来る日あり[illegible]

なあ[illegible]石のごとくて[illegible]

たえまなきかとして

せにうまて　○あづま車のやつまてる

大やをのうこまう　○うれしかば　よよつものうゆく

[illegible]　[illegible]

にうるさく　[illegible]

とだうう　[illegible]　[illegible]

ひまやこまり　[illegible]　○ひまなもいさ　一まむさに

をうある　飛ある　○いざたるに　[illegible]

[illegible]　いたんしまでえいもれあく

さまそらく　[illegible]　[illegible]

たどしなさ　なぐ[illegible]　○さまひ　[illegible]

わるしのとる　○すのと　[illegible]

[illegible]　人数[illegible]　○[illegible]月[illegible]
[illegible]　世上[illegible]　[illegible]
[illegible]　○あつさ[illegible]月出る
なかるゝみな　なかるゝ[illegible]　水深日[illegible]
[illegible]　○[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　○神[illegible]
あをぬまのなまぐひ　[illegible]
ひとえめうち　一[illegible]の中く
[illegible]　河[illegible]　解[illegible]

世ゆゑ[illegible]　○あをぬまの[illegible]　大[illegible]
[illegible]　[illegible]の感慨く
[illegible]　[illegible]　○[illegible]　三月く
[illegible]　[illegible]　[illegible]
世に[illegible]　世[illegible]　わざとく
[illegible]　○[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　○[illegible]
かりめ[illegible]　[illegible]
よ[illegible]　○[illegible]　[illegible]

枝をつたひてこぼれ落たる露もまた
立くるんもてあそぶ人もおわすめて枝うち折にかりたる
なよてあるなりけり　一説
ここよの国　世こよの国　日本紀　蓬莱山　日本紀
第五に浦潟子と泳るもてーう
白玉の第よりいとくとこよぐ〜棚しぬまこハ云〜　拾遺
万葉集　松浦乃浦乃
ふ〜ましてうるいひん　廉く奉の起るゞ始めく
あ〜のう〜ふまひさる程なるまこハ　うるまこしのな
けるゞ
○什ある拾〜〜〜

いるゝ色　うるとる　○海人のさえづり
あとふびのさしぬさ　見ぬ中にあとけのまぐるく
海士どもの求合して海はゝ拾
えやとなる　えうしく　○元井うるひて
已の日のうるく　三月　○人さめせて　見たのそさ
うちつうさ　口号　日本紀　○たうえ　人さるうさ
ひぢかさるて　俄なる句
海乃おもて　波の白とう
○第八てさうこぬも老ぬ　見渡のげハ　源氏
流星ぬてようとう　沖遠と手ものハ

たゞよふにかく

わきまへても源氏に傳る物あれハかゝるところおぼつかなくぞ思ふべし 堂上由緒

△おもへらく渡の川も岸にやがてみおのすぢにやらん 源氏

後藤のむねあハせて源氏身一つにて文字にて白

と切くおもひそ逢にしかなと思ひけるに渡の川つまり

と流の水源しなりしと度なきかりて流る身を逢

みゆるをえたる逢によせてみおハ身のふくく身によせつ

△渡りかは身なからさえ浮やしなかれてハ身のせにもまよひて 織部

氷沫とも身によせてほのせハ逢かく源氏の御身を

もまよひて我身ハ流んとく

△たつかなきもとひとりぬれぎぬをかつきぬるも友とこそ 頭中将

なつかしからぬまたあるまいてあなかしこにたつかなき

もと井をさしても思ふからもあり又云たつかなきハ

ふ便く霧にまかせてくれぞさふらひし比興の

友とこし

一説 詞云

おもしろもおかしたんをかるごとくろのたんなどにたき

ぐるしいかなわざとまよひて詠んめでたるひとりの経

ひとりわするにもあらかくへものもてまいらるとみえ

はらんどうに作りしる人渡るゆゑとせずんば傳くやうげ

ものさびしうおもとりとりはでごもづけせまをばかくひ
あらふとぞ
あしたの用にごぜんをぐろくぜんなどを洗そし
ちゃくるあるにあまをみるのうそで人貝あうび
かふとを上ーてはに多る浦氏のこひまとと
ぜとをとと又はぞたまるとそうと紙

○沼石　巻十

元と沼と云ふ名ありし頃武士の三月より世の秋
ゆゑよしなどのこと

一沼と月と二月彩上色のもくりうさのるる事風も
常くく雲の中沙弥るぶんを出ようとひと夜あり次
慶い沒こるうちに沼のあるに歳も山ぶ沼るまでぞ
や紅吉の神小沼風とぶ山ぶ孫ぶ

一沼武蔵ましろこまとて相模国に名ある繰
神乃みちびきやうにまやあるて汁浦をさうも
とぶこあるぶさに小舟に人二三人沼武の小姫をし

てあるに沼石の浦より入るく三月廿六日に出ー
て沼浦へ舟と入るよ美の名あるとも

一沼石に沼のつにはこもも附こにつけて舟とさう
にぶさなどのと沼やく沼よりひつむつる箱の名
町ある舟より軍に出ようと

一沼と乃ようるこ乃に二条院の池の留りを
思ます月のまに沼沼沼あり月事に乃石と武琴
と袋より出ようさるしまに美の名邑軍の
こと沼より出ようさるしまに美の名邑軍の
まま又入道軍記

一源左衛門尉と結婚いのうて十八年に成る源氏の方迄
も出産なりと入道殿の喜ぶ
り
一源氏より兵部卿の宮左衛門督へ文つかはしたんもの
ときとて返事もだに入るべきなれば事の
一四書よい物のさとしあるべしと三月朔より十五まで
毎日く事の文に相つぐの事少落たるをひく
源氏のもとにはらまれしとよろこばしく二条大臣右衛門督
まいりとて一位殿もまづひ
一秋よりて入道殿姫と源氏へまいりとのまゐ

人々さたに八月十五の月に姫君琴をとりもすらんと
て入るべき人とつゝかせて源氏琴をとりもすらんと
兼ねてまてうけたまはりおき
一源氏君をうらやましとへやうもなくたるべしか
一年うつりて　源氏廿七歳兵部卿宮三条殿おなじこと
秋頃ほゝ事の宮二条殿おなじ
いもうとの宮入内よりとさはいろいろ源氏とて
四月ものあり
一六月より左衛門督懐妊源氏琴のもとにまゐる
上皇のもとひさまゐり上ものと源氏ものあるさの

よ六より十までを中の詞より上げねたかもぬされよ
京へむかへんとのまゝ
一八月に二条院へ御参りまして上皇にさぶらふのねまて源長
様大納言にまゐりて冷泉院は付ほどまゐりて
十歳にて深氏御元御保よりに為大弐の殿より源氏
へ御するてしの文これが半く
一連歌の手にて用ゆる詞 并ニ
かくるより先づまでて みなもし ○みちのは 花の色さへ
見さくるとて ありそふる心 ○おもはぢや 風も姿がら
かやのいとうき 章若の思ひ ○そこらの人 おもへのみと

色くめぐり 又色乃都く ○浜のさゆ
見ハ空とまかなりけれ 雲客をしおす
月の影ようしくし ○さとし 雌し
なけさらすもわびし 指さきも本もわびし
まいの風 夜風し 夜おもひまろ花がとし
けりをさとする 無なを後く さ海こん
乞食する海士も軽らしげに
ちらじこ 入道乃住するもとを ○思ひあぐり
まつ風をしかりく ○ま○まで 契をひくことと
つれなぞの恥やうき ふつれなきづつひとすさとく

はつ春ふう　　九のまちとてとそ
めめわらひ　　○山ふしうり　弘めおろして
いまはまゝ人　　罪まうさる人○せうもぐらさ
りぐ　　れだうなる紅くんらしうさ
せごまりて　　おさうさ行とそ
あひまるの　　甲斐すまうさまのく
はてうた　　ふうとくしひとりまどく
甲方のうく　　○物いはさうさ
ひぐ〳〵　　○おもたくる　年ようたく
ぼうを　　比巴〳〵　○せんどうさ　行ぐさし

○うとはまたは神のたまけおらどぶ志ちやとあひたまうと　浦氏
海にまたは神ハ竜まうと又ハ紙ハ月の出の橋ハ小ふ坂
波ようなり神く上ハ河に海の中ハ鈴まうの月の
神ちに新まうて行とあり　八百人雪ふの河し
ハまうハ坂波と同じ　ハ百人雪ふの河し
○りぐまも乙に物をたのやもぶ　浦氏
やまやハ人とよひけまうる河くやしやなどいまうく
やよ舟ものまうて神のたまうせハ物ふの乙に行とあほ　立秋
ぶらんんぶたやや屋よりたにまぐまうのまうまうあまん　四位上左京
んとふ浦氏の乙をまうあまく浦氏のまうを行ぐゆなな

やうなるやさやうなるなごりをしたひ
秋の夜の月をのみよわうるるきのにはまことに
附のるハ行附し　うるはしのうもし
久しかの月をのみまもりあかしもやめ来あらんとよ
一之　初よいさく
源内　ものよりはるかにしたかのさとみづからつくり人をとゝのへし
さとものたまはせひとてまゐりてとさてで
あびさまへさにはるあるまことにおもひとさひとりあのまでざ
ゆふもたどのまをとをきてうるうらふと思て
ひとり祝ものもたてあやつもとさひとあらしめらさひさと
[illegible]氏先　出家に入道をとうとてある
入名ものハひををしてうるのとひう勢ま源
氏乃川四乃名をよ人る伊勢の海とうとをそ
源氏も附しひやうしてうるまをと　入名琴
ひさけてめで学四　次のまに源氏の四乃名に酒と
志ひめまする

○澪源（みをのゝ）　十一卷

[illegible]　源氏廿七巻[illegible]

廿八巻の十一月まゝの中

一源氏物語のまゝ八雲紙（やくもがみ）[illegible]

一源氏廿八巻の二月より冷泉院十一歳にて元服（げんぷく）[illegible]

同月廿八日（はつかあまり）陰日（かげひ）出来（しゅつらい）[illegible]

一三月十六日源右大臣出家[illegible]

乃（のち）[illegible]

一月夢に見る星へ源氏[illegible]

一同一年の秋源氏信濃に新たに領地を給はる所石上山寺
南の懐妊のさたにて えまうでどと源氏の給ふを
きてぶまいりあはせ給ふ 源氏のこころの外人十文
たふ裏紙を調て杉原の中まあり 紙墨のめでた
くうつくしさ 見るに信濃に信ありて 女上人のるこころを
調ぶるかやう 所石上えまでといさうのすちんる
神もうん入給まで 今日八幡宮のこくまたんと潜と
わりぬさる源氏もおのまてくるて
一源氏の社とたちて 所せうえうし 紙墨のこくし
きい 堀河のこくらんで 所石上 やうまいる 所

あり 所石上 四裏 鴻 こそ 大 る 本 源 ふ 所 た
てまたる

一六条 文を示 歌 文 こ ま 上 源 て 病 死 き
一 主 て 歌 し 用 ら 詞 并 寺
さやたんえ一 夢 河 海 に 明 し 年 さ だ う ん く
みて 漢 書 し 御 古 公 天 歌 の 文 日 紙 ら 風 を お さ め 信
よのだ り 信 し 八 年 し 号 す る こ
月 と 行 ち ん つ こ こ ひ
あ ら む め あ り 周 器 く
ら こ ま る 世 紙 合 ら ん こ く

○ たちまさる人

たてづく　結束し　○さいもひ人
おさまれる世たいの数を社ど出つくる
中のおとり　伝はきとも云○もせとうり　寝巻
かど　ちつけるく○いく　かめるる祖
神ばけする　世事よるるくく又ロさこが伸さるはも
用る糸まるく　ちてどもう　ちてうしく
又十日のいもひ　ちむまこて又十日といのいもひと云
ちおるる　雅付　おさるる　○うれ　海色の杉く
いけ世の中繋もつくる　清ひたくうよろこびるく
こよるり　ちあたる祖　赤るる

こめさ　おさるるさちもく又たのさくるめうこさく
たけり　稲く　○なごやん　ちくく
ちづさ　世ちんく　○屋づく
世ちんく　又稲くうくもく
この井ところ　宮ちく○うんだく　神変
あと色ちく　極扇の義人乃さる勤屋絶と色と云
あうざめ　又伝く拾ひ度のもけと延府統と云絶
いまめく　ちづくさく○あうく陸のまひ
色ちるに　約束ときと又杉いと紀ちと云
あうく陸　かりるあく　○神のちく

かたにをうちて　きを伐の古歌乃一く
こまなべて　約束ぐべく。おもよめるうた
あしたづの　清潔なる也　○清潔なる也
あふぎちる　○みやひて　風流なるの
なりひらも　○言うんぐまを
なをき人のあまりけるん右　○高うさ　下高く
いつくしき　歌にうたにしさし
あつまさ　病深く　○よとどり　撰ようえく
○いつも神うちかをんとあるう世をへてすでん岩のおひさ紀　源氏
しかことハ四石上乃　○この源氏のひめきのすし源氏を

といつもうちもしに姫をもしんとく岩とハ盤石切く
もを人をとう源氏の神を宮　でうたんとく
ひとりして出づる神の祖　さて出ぬ　名上
源氏へ出に神をとりあ　ふりてはげ　を紡
ぶよめるあをとてくを　ちくむくるくのの
○位言の出人をあ　れ神代のをとけ　出ハ　恒元
出に和をををうかる　ふ和ををむ　さ　歌　神を
とハむすこたをの　く入めでたさ　ゆをうをさといて
をねをうるとをてる　れかくよ　ゆるくあく
あをを波のまをひよ　位言乃神をとけてをを　源氏

文字二月上巳よりたにてのうぐいすの神乃みちび
きにまかせうとゝ出まへのうたかぶあり上手く
△ゑがけさのむりに仰る格式たうの方のなにかし
むりに仰るとゝ仰石の伴くちにふて云る歌を
よせまり義清しらず名あるとも家けさとゝ去今
ゝ
あにより西裏乃清とゝ詠けど名にかくまで神ふれる
一首　初云
かのわらはみやびひいらさてしとゝ仰るもめるとも
ふかせうとゝとゝだにてふるぎさめるや市にあんて
とにかくにとゝ仰よりたかりまつりうえわるとゝらん
ゝいまゝゝかるかたまりたにもあやまびに
まるとゝ仰るあのもちうゝさとれうけぬうやとゝ
さるのもやとまいてゝうひたんとうにまうけまるう
みとうゝ筆をみしれゝるあでもるゝにてまとれとゝ
おかやたうゝこゝ
みとてもまるうほまもでわけるえたゝ云る
たゝのくゝまたやうゝみとゝせをゝ仰ゝめ月に如光
ありうゝにかうんどうゝ有　なにまづのうゝに源氏
年にのう年とゝめてゝとゝ仰ゝ云ゝ月まで

ア[illegible]金[illegible]仍借瓦あましかり

○義朝　樋殿のうばゝ

末にハ四ツ子もあり

今にも知るも義朝と計あり源氏物語ハ百六十八巻
みなとゝめのゝまゝ七八歳の比ハ
一ツ橋の御母世におわしける大武よりの
おへ下る末橋の乳母ハ大武ゟ嫁し
てひの男を持て下る末つゝ
ゝ下り給ひ

一卯月ハ末に源氏橋の乳母ハ義朝
の後妻なり。ひるまちハ惟宗
四郎ゟ出る。結局ハ御母ハ

さて馬のもちて参る家とて人の氏といふ事
一流氏ともやうと水ともひとつ義とぞしるべきとてもせのう
てなほに二条流乃末流へうとまめ
一まと歌に更へら河平千
せがきたまし　平千の河　○こたま　樹神と云
そこそハ　うれしく　○おもめ　下げく
さるちまあげまさ　半うれしく
えづもひ　牧章の花さまさし
ひまもるる　なるけるまはるまるる云
のしやど　萩のめとしまう

たとうの法
んどせ
うけひさ
やぶもく
たけさまあし
いつのふどう
うつのみたるる
激しの道く
松てぶせ
いびつの法まる

ふ乃おとうく
○人よいどむ　あうまく
うけぶまく　○あるみく　あるにく
萩原　○たまる　寄ぬさし
さたるまあるまひし
○ものもく　んるもどし
ふ激　○ものもく　んるもどし
○ものもつるえ　おとうくまく
○世代じめるさ　えうえく
ぶつの法まる　えあつのぶ九人ぶう

河海にむすこふねのとけ乃人まて蟬もうたもさや
ふ絹のかさ[illegible]もあ又重ねて[illegible]あ[illegible]代[illegible]く
くのえう　　月方の一名く意安こ者
ちうまさ帳のうち　　塵はらもうも秋
あまぞこも秋乃もぞこめうさて　いまあるもこでもく
えうさちづぬ　ふうさく　○　漆　　無もうさく
つさく　　つさこ　　ひさく○ひわれおおく除
よもうもの者に　菱波れあう○あうく　うくく
うくのうあうふあひに　菊　れも下地ようさ者とく
りづさ　何　うさ板く

むもこいてき　まれ[illegible]
をうさあのうく　うあゆまうとい[illegible]
○うさ人をうあなもむうあうさ[illegible]あうさ　まつむ
おう人まつむ乃の又ひうちの文く歳あうあ
四日しうさつむ乃うち[illegible]
○夜のうちうあくみうるハ松を者の者うやう　ほ氏
うちうハ波のうてけうる編くまうつむの結まうう
乃によせて松をうてよう河に枝うあ[illegible]
にううてなんうあうをうけまう
○年をへて結ぶうう　まつむ乃
者を花のたうふ数うう

紙にかきてとりあつめたる歌のなかにかきつけ侍る

一首　詞云

いにしへのこころばへ（源氏）

ふるもあるまさるもあるべきなれども

さきにたちまさるはかりなくさびしきの（深井八月十八日）

月につけてさとにある柳もいろいろにもえいづるもさは

らぬこころばへまさりたるものなれば

やうやうにあらためさせ給ふ（源氏）

さきにえらばれたるつゆけさまさるべん

なるつゆをうしなはんとすれば

ゆくすゑのこころもとなくおぼしめす（源氏）

こひしきとのもとにはなのつゆをうしなはんとすれば

ひつくりまさる　おなじのあめをうしなはんとすれば

なごりにさ月出来

あやめ草ながき月日をかけてこそ

柳もいろいろまさりけれ

ふかさしらし（源氏）

これをうしなはんとすれば

ふるあめにぬれまさりたる柳のいとをかけ入て

ふる年もうしなはんとすれば

○関一全　横斧二

詞とる巻名とて　源氏供八ツ九月ばかりの事

一九月晦日（みそかつごもり）ばかりの作なり仏ひかりの御子の君の輝

と生たる御方実山寺に源氏の公山寺（まうでら）に行ひ給ふ

乃さしこまる源氏と京輝と云よしろ八せうむし

ゆゑ光いよいよ光ますけるとのしたせさし

光ハえ思ひすて給ひしのち世の中の

をくれ給ふ事のなげき思ひのまゝにかなしみ

一生涯に思ひ詞斧二ツ

よすがなく　仮なるく

○関入日

ゑ[illegible]まで　　○うちのその浦　　大はのまち

あま田山　　あま田の山　　○おの車

岡山の山の枚も　　○世にさぐ山（源氏）

はんをさて　　○わたつのあきあまをたのもしみ

わたつはたまさらゆさ[illegible]

[illegible]海松（みる）

[illegible]海（ば）

[illegible]

[illegible]

[illegible]

せきやの山やは付[illegible]

ばさとは[illegible]

[illegible]

一首　　初云

せきの入日（いりひ）の山（源）の石山[illegible]

山にみ[illegible]

[illegible]

[illegible]

九月つごもりのまとはかたもかぎれ

[illegible]

[illegible]

はなちなすだまとおもひしに
かなしきことのよをてなりの
ゆくへとしらせきとあわれ
行縢おもてに
もとるゝ人おもとすると
ゆくへこの枝ノ下に年ども
未ごろまでありこまる
源氏の年ゝ
軍ノさゝへ

○法華巻十二

詞とゝ巻名とは　源氏、二十歳の二月

一冷泉院ノ御とし十三ゝ文とゝ下に御文よりのぞくまゝ

六条の文を西の姫ゝ二巻まゝ出て御ぶくに

よりて秋好中宮（アキコノムノ）文こゝまゝ中文

一冷泉の帝位とゝ大将殿も絵の上ゝ事ゝに

桂中納言ノ姫ゝ（ちゝ）御女御（ちゝ）御ぶくより御文女ゝ（ちゝ）さいく

帝ゝ（みかど）ゝ

一月ゝ（つき）この位とゝ年中行事ゝ巻ゝ初の

八三月ゝ（つき）ゝ桂殿ゝ冷泉の人ゝ（ひと）ゝ

太ハ帝ゝ（みかど）ゝ母の八三月ゝ（つき）ゝ世ゝ女ゝ（ひと）ゝ

冷泉院の出産ゝ（しゅつさん）ゝ

小ゝ（こ）ゝ桂中納言ゝ（ちゝ）ゝ源氏ゝ（ちゝ）ゝ

帥ゝ（そつ）ゝ文ゝ（ふみ）ゝ

又ゝ（また）ゝ

一ゝ（ひと）ゝ

中納言ゝ（ちゝ）ゝ琴ゝ（きん）ゝ源氏ゝ（ちゝ）ゝ

この巻ゝ（まき）ゝ

ゝ（ちゝ）ゝ

一ゝ（ひと）ゝ

年もわかきを一夏河内に相撲とて延年に比しまた
年わかきを
一夏諸国に出て河内
けげ
さごやう
きしろ
おとるひる
おそるる
わらうもどりおやる行方おそろ
まくまくとさうぞく
むしのけらまぢる

○分をつて
○わらうる　おとふきん
○ん[illegible]ばし　奥ぶるれ
○せうとこ　文こ

いのちさいとひるるびるるおろ
すぐるきやう　おずるやうに人乃いたこ
乃ぢろて　延こ　○今ちのさこ　海の地
○わらはるるとしをかたにてもるけさ神やいさ　年産流
かどふかこつけく外文乃トの舟みどをるを乃てさし
ます舟に二さびをのの[illegible]おもむしまりとこ
つけにてをきゆと神やいさやいとも
○わるもとまるたいに一ともあてはいまるるのさ　秋文
一とハ二さびをの方へ行もむしまりとの行初るやき
とくあてハ海をさくたなさとふ上河よ毎文とを

のるのかどまあるにかけてうるく毋ゑにて中われの
はつ雁ハ初音なりしもいまふたりきとく
〈ひとりあてなる思ひふあまのもしほたれてそこぞうけ 定上
かまとうこ形く涙とのその浦風さはとしてり浦風ん
はつるハ岩とも繪とかきてすべしべくし枕とく
涙とはもりて岩とも日紀のやうに繪とうこ行とあま
ゆもとに源氏へうんを行とあるや
〈うゑ見ぬ海ちもりもりてゆ
一三のうたはつるのとく 源氏
はつ雁形くだりてはいとこ涙とはもせうとはこのうこ

まをうんてこ

一忘

忘おいせの屋ハせいはうでんのあひさくあむこうを
三月廿日く　うんどの山屋ハ初山さんの花みのこん
の屋ハふくたんむつぎの中文たハこれぞんのありくたハ
きんのもこう忘と入てとうの紀くてもうみ
出つてえうあるとびてとをつるかさつて地し
きるむてこれ地のうに水ハふちーこ（定家にちーー）えんてあて
ううきく　忘をこれあつてうとうとうこ立人ふあついつまさ
おて白うこうとうこ（相）ふくこのこ（定家）ふこ（定家）
てうこ初のたざこ　あこのハこれ行ふ井まふぢうこものの

おくものたちらんろうとこたせんうのまさづえ うちさい
あをはのこまのにしきあり（くもにてあるとうぐけるる）（くもにてのうぐ）
ちをとれあつまわ〜ふあをてもえぎにさきたに 柳のうざこ（あをてはうあを）（あをそうを）小ぐさか
（たちたうう〜まく）
さねのあこめ たたとも たにおまへにたどことをうき 出てうえ
のうくはをく うくのをあ（たま）（右）まをくしさうできはけう
みどのめあるもしおく（ほそ子も）（頭中将）うんぢうるどんまうう
（端ちう）日うちの文もまうくはを合のうちまけの羽をく
（あさ）あさづまるのみさうじをあけてゆうもたりまた
（わさうまかし清涼殿の名）
たうちうまうはをあのまを出まうく東あけさうにうる
廿日の月あり

○松風　巻之十三

奇しく河内の巻名とし、源氏の秋く、船遊び、
一二条院のうちにて、東院つくりまして、紫の君をうつ
ろはせたまふ。東の対に、花散里
一大井の家を、源氏、見給ひ、
まして、源氏、又、須磨、明石、住をやめ給ふ
須磨、明石、堂のうちくとに、今の新邸、堂のまへ、廣に
ひろくまたまたのかたの、ひまなく、源氏、ゆる日たづねど
入道、大井の川、西にて、源氏、明石、蘭の松、たづねて、おくまるを
ちなみに、源氏の、琴、引給ふ、松、琴、給ふ、松、

一源氏、大井の家へ、うつり給ふ。又の日、やうの
あらしの、雨、ふりて、九帳、ぬれて、物、
まし、栖、荒、ちくうつり、中宮、参給ふの、夢、河、流、
新、邸、の、家、作、ものの、かたち、おかしく、きよく、又、大井
の、家へ、月、あきらか、琴、引給ふ、
一次の日、雨、ふり、ぬれ、に、桂、院、に、光、のぼり、
夜、人、おそれ、まつ、ま、
夜、大井、家へ、もあまた、
桂、中、納、言、
を、
夜、

なるにはくの小唐の人たちにぐしたりけるよう来れり
務同じもの　まるに海のさづり出るを見て
まる元小唐萩のえだ　いつけて来て月にうりてよう
ひき抱とも川風まをきて　四日一条殿にて勅使
来て　又の日海苔　一連歌　月　詩　平　二
かごうる　かこくとまる　紅
海つるかひる　紅　似る　紅　紅　紅　紅
つるしにき　つまるを　ふるきい　ふげく
川つるえもいまも松げ　少食

みるとうれし　水ふ　碓ふく　ありもぬいのちとうざう
よるひるむの公　蛇のやまひと　弟　乳　楚　氏　ふ
蛇とい人とすると　ものあを蛇　いとくもを楚
にてとつまて
神とし　春の小さ　さらぬ　知
ひそ　法　こら年　多の年
かの巻にあり　いてて紅　秋
うらまたのう　あのまく　文　せまり
世　順風　大井　松風
おのえあ　文　えちとよめり

くらくなりさる　文海の人間のあるひとのまん
まくもとまる山にまるうり　あの姿を山ざくと云
あすもと　笑し　○おとろくくらくらくらくの
かいあるか　おとろく　○あるのぐ　岡伽具
なあげるすぐさ　紅く○あいてそげ　荒磯法
ちどけるさすぐさ　袖まぐいと云
清みで宿のあるじか　○こやひなぐ　かめたる心
いさら井ふまもて　小井　まくはむらく
けさいたとやぎ　○やえ月出　奔星と云
そびやぎ　船のうるさ　ゆうるく

けざやぎ　くちよげるく　よるれるく　ちもきれ
山の海ふまぐ　あるく　あるぐ　あるぐ　響く
おるあるび　山越と年　こひるさ　酔法
ゆうけのあ
その約　神のうらひあく　くとけど
引ちむめ文とく　人ぐち
ひるのよがよひ　こもと云　つるる法　細さ
分のさひんはあまあのう　あのさ
かのさ　校く　校くまく　校くむさ　初と云
いるてゆさ　秋とる　紅まの　紅まの　四名

[illegible]
秋をもてあつかひ三三五五の男女に船を出してうきまにのり浦
の山をもあるまと海をあるくとうきまにのり浦氏
あまとも釣をするあり浦寒の浦武市此彼とて
櫂よりて天津の海を乗人とて無事にまりて
牛女に毎年てうりを買ひてよあり彼方今こそ
天津かよ櫂と言とうんおもの橋ちやちやや
今ちやちにかよ[illegible]
[illegible]
かりと契りしをたのしにて杉のひとをまねをまて

書をとりて[illegible]浦をそのまく浦書をみて[illegible]務
の立をもうの月人
月のすむ月のもちるれしうつ此けいのけるん 冷泉院
おもの星にもそくのけるん
[illegible]
土右文 江海
一首 初云
心の月きぶまぐらう結ぶ野色のをこそさうよ結
[illegible]
いぐるるあんかぶりて
[illegible]

うゐぶねもたるたはまのさづくにすぐ出るかたにまつをみる先ぶねもちかくまるまゝづくりにつけをまるやぎ乃えぶねをてにてさまいまて

大井川のうゐぶねあつまりて後としの事をわるまのうくを浦氏のさばに部中ねしとそれのうちと　小唐すて野ようきまれる先ぶねもの前めえぶねふるつけまるかり

○ 落雲　元十月

[illegible]と[illegible]奉名を[illegible]源世[illegible]世一万秋まで

一万石姫君二条[illegible]

やうやう十二月雪[illegible]

[illegible]二条院[illegible]

一月日星のさとりあり[illegible]

て二月よりもうとなり

一枝[illegible]

[illegible]源氏の[illegible]奉せ[illegible]

秋の月に源氏を[illegible]

相撲の節たゞ人[illegible]

一二条院と里にて秋[illegible]

一大井[illegible]

[illegible]源氏と[illegible]

一連歌[illegible]

川づゝの[illegible]

つゝさ[illegible]

[illegible]

人の[illegible]

あちこち

○ うゝの[illegible]

○ [illegible]

○ [illegible]

○ [illegible]

○ たゞ[illegible]

年人

さむらひ　さむらひ財おとうの不
ものの後　　○人ものもと　　ん
いるひ　　いやごろく　○ひるかわらび
ぜんぜんまるにのおと　髪ときのすくけ尼のやうにて
まつりにあるとをくこ　尼の髪のおとく
姫をのるにはこ家　家の二年ばかりさし
あまごり　わうこうろ　尼四人をすく人形
人だまい　伴の女車　○歩ひろこと　ちのうしまこ
おひらこに　大やうにく　○まうまり　脚色
梅人　　○ねのさとし　ねつけ

浦津田を十町つまる　梅人のうたひねの句
美乃ものうのうにはし　美乃ものうきのうきもこと
道のさき　ものとくこ　梅しこ云まりとて美乃
行とと美乃うにはしこ
走りうるおい　道世乃新く　○うつ後　うつの公
星の光をのたまい　こうは星とものれこく
いぶき　ん　ものこく　○ものこ　遠例ち
おもとも　沙乃　○人のうまわぶかうに今あす
ふぶ　ふぶくるふ　生師く
ものこのおこ　世のす　○世をまつごち　改く

くよくまゆり　んに於るくま○よこさ彼あるつき　たゞ延ひ云
さしき代　聖人の代○以下は是世也　聖代人
やつしろげ　子孫乃さかへめでたき事と云
さしつさへ　御入てく○老とねのうへまる　前　老とね
ふさりしかぬ　宿にと来く似おおく
なりじ　さびしくさし
△末よ世き二葉の松に引きて見る事をきみを見るつき　以下上
以右作者云ける事を大井より二条院へさし
是よみて侍りける丹の母乃許へ彷書を視してよめり
武隈の松を子かれいたづらまの松は小雲の千代をたのしまん　源武

おいは出く孫もまたれいとは種姓よきさんく松風のせに
あさき根ざしやいかにとたゞ云並のたけての右入たは主漢
出てをし居云は亜以歌乃松なる由たけくまは奥州
武隈乃松は二本の松は母に比し小松を兼光に比す
△船よむるまを万人のあてにしれおとをうらんせるとし待人あ　先上
源武を船よたとへて其を万人は以右とせるは美容之
侶るゝ為なるゝひおに擬人として者りこと詞まおと述
まこと来とくそおとともいかあと好のりを文を毎と
めよしいよ詞もあり
行てわくそあとともさぬこん事く小生を万人はいんさくこも　源武也

あるとき平家ハ極人の宿こ実の字ろくをするこ
ゝとゝふ海ゝて帰るさゝ

一ゑ

なたとたゝこゝろでざしあるさまを人をうらゝて
見るゝふとちらゝ人のめぐまれたるおしゝ
さまてにこゝろ

ゝんとの内にこゝのゆゑざしあるさまをゝたおちゝ人
あり　宮ゝ上ゝ様の内ゝふとゝんす　深雪姫　宮ゝ
ゝ宮ゝ中ゝ様のゝまをゝうゝひゝてゝ宮ゝ上ゝ乃ゝ有ゝ
ゝ有ゝとゝゝゝるゝゝゝ人ゝしゝたゝ話ゝ

○藁（わさうか）　巻十五

源氏一の九月ばかりにまして
一条院（源氏の住まい　桐つぼ帝の子）
御流れ　又ものつゝみ　文房具
おくりたまひ　又の桃園宮に
女　女こ　女　女　ひとりとして　女院を源氏を
ひとり
一条院　源氏　女　女　ひとりとして　宮　人　きこえ
　　つぼ　大　ひとりとして　あけ
つぼ　須　さび　ひ　入て　女　女
　　源　白　出

一条院と源氏とみの秋のもみぢの月に宮つかへをして
多なかきものの名にしてきかなかるるせんざいのもみぢ
ふかしやるもいふかむびぬの水もすごきにわ
さへおろしてをまろがしせさ物
一まてかの月へき紅葉
とひ見るまめ
よづるあさ
雨せく
うてさく
雨めくし

○さうあづきせ
ものしく　○おもう　月ものく
今もむ　○さうめて　文ものこ
雨まくし　○人るをけれ

をもちうるなり　○老人やきられる夜
かまをまうし　れぐくうまとうるし
すきん　○うしさいなまて　小乃八し
はいすり　月雪　○耳おとろに　耳よりぬく
うめうき　老人　○かしこき　うけるこし
祝ものしる様人　○すげうるに　歯のぬけうるく
ムとぬきに異ひ　わやぐ○ぬぐすぎ　さうるく
をたちて　ムやぐて　押しる事
たなをまゆ　ぬぎを異ひ
ムをうく　ムをうく○　やと水もむ　水水て高ようまう

わすげて　おさうまうすきく
重ろ山ろ作　○ものとき　ものとさぐ
ころ世のふろう　丈河高世
○月のまに　ものもしすれ　ものもしすれ　源氏
世の愛するといふ　本草の　愛する　愛の女　今の月に
養ると下のもく　ふるさと　ふし　古と　高さう　桃園の女
丈宮の秋く
○水と地いまの水　行る　高ろ　ものもしすれ　月のうけ　なのあるく　生上
月のなるとハかりし　ものとき　高　秋の秋　よりる
うしろ　儲　する　ものもしすれ

今はのこゝろをよめる　源氏

はるのよの夢にたとへつるものを　雪もよ

ふもよろしく二字に付字こゝ又仮名又平仮名とむつは

きまり　雪の夢の勢に比せと

今はのこゝろをよめる　源氏

こけてぬはたえさひさしみるの夢にたとへつる雪

こけてぬはたに雪のふりしきぬ　雪の中に今をこし

おいのひつふさんもろとともに

一首　初云

日ひとえ　雪の夜の梅花を源氏ともに

つれ〳〵行とのけぢめ　雪もちらぬさ

かりのようにとあるに雪の夢のようにとあるに月に雪ひかりあひたる雪

あやしうさるものゝ心にしたがはせ山せうなりの事まて心

ひかずさま　月雪とも

あさ〳〵よりてんをまさまあげ雪月まるもちかた

ちなるせんざいのけ公ようやうやもいとうむ

きびていけのこゝろもえもいはすときわゝ雪まて

雪まろりせさせまたけるすゝ雪ふりつゝも

月にはてあかきやうになるゝ雪のあこのゝ

きおひたとけかのきとなるとがいかに雪あいまるにこゝまり

あまりなるんのとをとろこゝ雪にふまてもてやし

きるいとけざやうくちいさゑはわらけてよろこびそうなる
あぎたふもおそもやあけげかおけいとおわう
まろださんとてつけだれとえもをうごうさでまろ
さへ出るつまるまでに出るてんもるげるわらぬ
夕月をめる　雪れと行とにうづまぬたかとまえつ
うう走わまでちうるせんざいのけ　やく水むとび
池の水とどーうとまでとをにおろーうまろせてさ物
まあこめをさはくらるうんぶまきておびをとけるー
けまあまるかみのするえちいさゑはうこうぶまぬは
つよろうこにまーぎるおにひんぶーのつまた出る
女たんまるびまうぬ　源氏ふみをの用ぬをと
ろあうさうろ科めるんぶかまひまをうーうを絵ぬき
ぶんとうてまます